「こんなに気怠い眠たい昼間」

2009/09/11

お昼のカレーを食べ終えて、ごろりとその場に横になった。
今日は天気が良くて、カレーも美味しくて、私は幸せだ。
ぽかぽかと日差しが柔らかくて、閉じた瞼の裏側が赤く透けている。
そのままうとうとと眠りそうになって、慌てて起き上がった。
確かにこれ以上ないくらいの昼寝日和だけど、こんなに天気がいい気持ちのいい日を寝て過ごしてしまうのは何だかもったいない。
よし、と勢いをつけて立ち上がる。
「遊びに行くか！」
おっしゃ、と気合を入れて派手に音を立てて扉を開く。

「行ってくるー」
そのまま扉は開けっ放しで、誰もいない部屋、机の上に積み上げられた書類の山にひらひら手を振って廊下を走った。
目指す先は当然妹子のところだ。

「妹子ー！　……あれ？」
すぱーん！　と扉が外れそうな勢いで開いてやったのに、文句も罵倒もパンチもツッコミも、なんか硬くて物騒なものも何一つ飛んでは来なかった。
拍子抜けしてぼけっとその場に突っ立つ。
「おーい、イモっ子ー？」
妹子が、部屋の真ん中で転がっていた。
まさか、まさかなと思いつつゆっくり静かに扉を閉めて、何となく抜き足差し足でそばによる。
入り口に背を向けている妹子の正面に回り顔をのぞき込む。
目は閉じられていて、よく見たら胸もちゃんと上下していて安心した。ひとまず最悪の事態はなさそうだ。

ほ、と息を吐いて妹子のとなりに座り込んだ。

「……おーい？」

閉じた目の前に手をかざしてみるも、反応なし。
返事もない。
耳を澄ますと規則正しく呼吸が聞こえる。
ちらりと振り返ればそこには机があり、巻物が広げられていてどうやらまだ書きかけだ。
その書きかけの最後の方、注意して見ないとわからない程度に、字が乱れて行がぶれている。
また、妹子の顔を見て。
それから窓の外を見て。

「何お前、もしかしなくてもお昼寝か？」

良いご身分だなと何だか微笑ましい気持ちになる。
妹子の仕事部屋は小さめとはいえ個室だから、確かに寝ていてもバレないのだろう。
それにしても寝転がるなんて堂々としすぎじゃないか？
よっぽど疲れていたのか、昨日眠れなかったのか、それともただ単純に眠たかったのか。

「天気いいしな……」

それにしても、と私は妹子の顔を凝視する。
もしかしなくてもめずらしい寝顔だ。しかも、仕事中。
こいつ案外要領がいいから、ちょくちょくこんな風にして休憩したりしてるのかもしれないと思った。
きっとまわりにはバレてないのだろう。
それなら本当に妹子の寝顔なんて貴重なんじゃないか。
思えば思うほど、うずうずとした衝動を堪えられなくて、そっと私は机の上から筆を取ってきた。
寝ている相手を前にして、やることといったらひとつだろう。
筆に墨を含ませて、にやーっと笑う。
さて、なんて書いてやろうか。
とりあえずほっぺたとおでこかな。
にやにやしつつ、妹子を起こさないようにじりじりと身を屈めて、静かに静かに妹子の顔に筆を近づけていく。
あと、もうちょっと。
もうちょっと。

「……ん、う」

す、と妹子が不意に顔をしかめた。
びくんと心臓が跳ね上がって体がこわばる。
妹子が起きてしまったらどうしよう、と今さら思った。

手にした筆を見られたら言い訳できない、怒られる。
「んー……」
「ひ、ご、ごめ……」
妹子が、寝てるはずの妹子がぱっと腕を伸ばした。
ぶっ飛ばされると思った私は腕で顔をかばって目をつむる。

何が起きたのかはしばらくよくわかんなかった。
覚悟した痛みはいくら待ってもない。
代わりにどすんと全身に振動と衝撃。
あんまり痛くはなかったけどひたすらに驚く。身を縮めて、息がつまる。
何だか身動きが取れない。ちょっと苦しい。なんだこれ何だか天井が遠いような壁が横たわっているようなあれこれってあれか私が横になってるのか。
妹子の顔が異様に近いような。
すう、と妹子の寝息が、頬をかすめた。
「……っ！！」
ぎゃー！！　と全力で、でも心の中だけで、叫んだ。

妹子に抱きしめられている。
どう考えてもこの状態はそうとしか表現できない、できないけど、その事実はものすごいインパクトで頭の中をパンクさせてくる。
わわわわわとか意味のない言葉だけを垂れ流したがる口を閉じる。
すうすうと妹子の寝息が健やかでそれに比例して私の内心は大パニックだ。胸の中に大量の私がいてみんなどよめいてるような。
ああ頼むから落ち着いてくれ、とりあえず、まず、落ち着いて！
胸を押さえたくても抱きすくめられて満足に動けない。私の腕は私と妹子の体の間で折り畳まれたまま、ぎゅうぎゅう抱きしめてくる力に負けて動かせない。
む、胸板とか、なにこいつ結構しっかり筋肉ついてる。
嫌でもそういうことがわかってしまって、意識してしまった自分によけい胸の内がどよめく。
とにかくまず落ち着きたくて、いつの間にか墨が散らないように筆の毛先を手のひらで握りこんでいたことに気付いて、さすが私、冷静かつ的確な判断じゃないか、墨で服汚したら確実に怒られるからなとか、そんなことを適当に考えてみた。
冷静な自分を誉め称えて多少満足しただけで、全然どよめきは収まらなかった。もはやスタンディングオーベーションでウェーブだ。もう動揺しすぎて何が何だかよくわからない。
どっどっ、と心臓の音が早くてびっくりする。

背中に回った腕の力が思ったよりも強くてどうにもこうにも動けない。
っていうか、何、なんなの、この状況。
体中が熱い。顔とか、特に。
妹子に抱きつかれている。
その事実の破壊力の大きさに今さらくらくらした。
ぎゅう、と力をこめられて距離が近い。体温が近くてやっぱり叫びだしたくなる。
寝ぼけているんだろうか。寝ぼけてるんだろうな。だってそうじゃなきゃこんなことしないよなお前。
なんだかだらだらと嫌な汗さえかいてきそう。
お昼寝日和だとは思ってたけど、別に添い寝日和だとは思ってないよ。
目の前の妹子の何も考えてなさそうな表情にああもう、と情けない気持ちになる。
こんなに緊張してるのは私だけなんだと思うと泣けてきそう。
妹子の寝顔も寝息もどこまでも穏やかで、どよめいている胸の中の大量の私がバカみたいでかわいそうだ。
いや、もう、いい加減に落ち着けって。
頼むから。

ああああ早く起きろ！　バカ！　放せ、しまいにゃお前、なんだかんだ理由付けて無実の罪着せるぞ！　いやセクハラ面で言うなら既成事実があるから私に義があるような。っていうか既成事実って！　なんだかすごい言葉だなコラ！
ぐるぐるぐるぐる考えて、頭ん中がのぼせそうに絶賛混乱中の頃。
耳元で、ふふ、と息を吐くみたいに、かすかに笑う声を聞いた。
びっくりしてほんの少し身じろいで顔を見たら、妹子が微笑んでいた。
こんな顔も、できるのか。
びっくりして、見とれてしまう。
目を閉じていて、何となく幼く見える。強気そうな眉とかも、今はのんびりしてる。
そっと微笑む唇の形がきれいで、ようやく視線をそらす。

……くっそー、イモのくせに。

なんて顔して眠ってるんだ。
なんて無防備な、その表情。
嘘みたいだ。
なんかいい夢見てんのか。
私だって夢見てるみたいだよ。なんか、何かに騙されている気分だ。
こんな表情もできるなんて。

「いつもの仏頂面はどうしたんだよ、ばーか」

だったらいつも、いや、いつもじゃなくていいから、たまにでいいから、そうやって笑ってくれたらいいのに。
でも寝ている間は殴られもしないし臭いとも言われない。
ああもう！　とやけくそ気味な気持ちになって、ぽて、と額を妹子の胸のあたりに押しつけた。
無理に距離をとっているより、この方が楽だ。
冠が邪魔にならなくて、ようやくどこかに落としてしまったことに気付いた。頭の上に感触がない。
ぎゅう、と背中に回され、両手で抱きしめてくる腕があったかい。
あーあーあー、とそれ以上何も考えられない、なんか変なことを思いそうで考えたくない。変なことって何かって言われたって困るけどそう思って、目を閉じる。
今日は、絶好のお昼寝日和だ。添い寝日和ではないけどな。
目を閉じて、無理にでも私もお昼寝を満喫することにした。

なんかおいしい夢を見てた気がする。なんだっけかな。
おいしいからにはカレーだろうか。
ぼんやり、目を開けたら目の前に、もう本当に近い距離に妹子の顔があって、思わず叫び出しそうになった。
ぎゃ、の形で口が止まる。

妹子が、これ以上ないってくらいの不機嫌オーラばんばんに、私のことを凝視していた。
正直、ものすごく怖い。
口元なんか変な形で曲がってるし、鼻の上というか眉間というか、そのへんにくっきり濃いしわが寄ってるし。寄ってるというより刻みこまれてるってかんじの深さだ。
だらだらと緊張に嫌な汗をかきながら、ようやく私は現状を思い出した。
妹子が怖くて泣きそう。

「お、はよう」

とりあえず言ってみたけど、顔がこわばっている自覚はある。
妹子は半目をさらに細くしてじっと見つめてくる。
そして何の前触れもなく予備動作もなく突き飛ばされて私はごろごろ転がった。
悲鳴を上げたら舌かんだし。
床にひじを打って痛かったし。
散々すぎて泣きそうだ。

「お、お前、なにすんじゃい！！」
「あんたこそ何してんですか、訴えますよ」
「何で！？」

壁にぶち当たってようやく止まる。背中が痛いよ、チクショウ。
転がったまま見ると妹子は起きあがって胡座で、がりがりと後ろ頭をかいている。半目のままだ。あいつ、まだ寝ぼけてやがる。
「で、なんなんですか太子。セクハラですか」
もそもそと目をこすりながら、妹子が訴えますよとまた言った。
その言葉にはさすがに私だってかちんときたね。
「お前が！　お前の方から、捕まえてきたんだろうが！」
だって私悪くないし。
大声出したらやかましそうに妹子が耳に指をつっこんだ。
へー、とか言いながら。
くっそ、こいつ、やっぱり寝ぼけてやがる。
じっと睨みつけたらじとっと睨み返された。
でも私悪くないし。
そのままずっと睨み合ってたら、しばらくしてぴたりと妹子が動きを止めた。
「……僕が？」
心底不思議そうな表情だった。
「僕が、僕の方から？」
「そ、そうだ、お前が」
「太子を？」
「私を！」
ようやく話が通じたと安心したのも束の間。
かっと妹子が目を見開いてびくっとした。
どうやら目が覚めた様子の妹子がその険しい顔まま、物凄い勢いでにじり寄ってきた。
怖い。
ひっ、とようやく体を起こしたけど手探りで触れた背後は壁で。
そういえば今さら、未だに筆握ったままだったって気付いたけどそんなことどうでもよくって。
が、と勢いを殺さずに目前まで詰め寄られて襟首つかまれてその剣幕に思わずごめんなさいとか口走ってしまった。
「僕、何か言いませんでしたか？」
ぎりぎりと襟首を絞め上げられて苦しいんだけど。
「い、いや、何も」

なんでお前が怒るんだよ、と情けない気分でそれでも何とか答えた。
何も聞いてない。ただちょっと、笑ってたのを見ただけだ。
そういえばあれは結局なんだったんだろう。
今の剣幕からは想像もできないようなあの感じ。

ほ、と妹子が安心したように息を吐いて突然手を放してきた。
当然、そのまま床に投げ出される。

「……何なんだよ」

ごつんとかがあんとか、変な音したぞ今お前どうしてくれる。
それでも安心したように呆けている妹子と、その前の物凄い剣幕を思い出せば、何もかもがやぶ蛇になりそうでもうこれ以上は何も言うまいと決めた。

「それで、あんたは、この筆で何しようとしてたんですか？」
「いやあのその」

「さっさと答える！」
「あ、ほら妹子の仕事手伝おうかと！　私って優しくない？」
「僕の目を見て言ってください」
「……」

でも結局握ってた筆に気付かれて、なんか知らないけど正座させられて、おまけに説教されて。
ついでにそのまま馬子さんに突き出されて仕事増やされて終わらなくて帰れなくて。
なんだかんだで散々な一日だった。

「あー……」

でも妹子の寝顔と笑顔が見れたしな、思い出したらまた胸の中がどよめきそうになって、あわてて仕事に戻った。

「あ――……」

あのバカを馬子様の元に突き出して部屋に戻ってきて、見覚えのある冠が転がってることに気付いた。
困った。これ、返しに行くのは面倒くさい。
もう今日はあのバカの顔を見たくない。

「まあ、いいか」

必要だったら、気付いたらどうせ取りにくるだろう。
というかいつもかぶっているのに、なくなったことに気付かなかったのだろうか、あのバカは。
そして馬子様も何も言わなかったことを思い出して、思った以上に存在感のない冠を、捨ててしまってもいいんじゃないかとか少し思った。

結局机の脇に積み上げた書の一番上に置いておく。

部屋が静かで、ふっと後ろを振り返った。
当然だけど僕一人、他には誰もいない。
さっきまでは一人じゃなかった。
唐突に思い出したのはあろうことか抱きしめた体の温度の高さと、間抜けな寝顔。
この腕の中にあのバカがいたのだと思うとなんだか死にたくなった。
何してるんだ、僕は。

「……はぁぁ――……」

肺の中身を空っぽにするようなため息をついて、机に突っ伏した。
死にたい。
軽率な僕と、なぜが大人しく抱きしめられていたらしいあのバカのせいで。

だからあんな夢を見るんだ。
悪趣味にも、あのバカの夢なんて。

本当に何も言わなかっただろうか。
妙に落ち着きのなかったバカの様子を思い出して、でももう確かめることなんかできない。

「好きだ、ばーか」

こんなことならもっと、ちゃんと、抱きしめとけば良かった。

何してんだ一時間くらい前の僕。

それから自分の思考の終わってる具合にどうしても死にたくなって、同僚が仕事の進み具合を見に来るまで無心で頭を机にたたきつけていた。

「冬の終わりに昔話」

2009/09/17

太子の縁談がまとまったのだと、噂話に聞いた。

タイミングが、これがもう笑ってしまうくらいに悪い。
会えない日数だけを積み重ねて、それがもう何よりも雄弁だった。
直接会って確認する必要もない、だから僕は噂話を認めざるを得なかった。
その理由も、ついでに僕をもう一度隋への全権大使にという話が来たことやその他の事柄も、何もかもがこの際判りやす過ぎた。
そこに含まれた意味を理解することは容易い。この状況はきっと僕にそれらの意味を理解させるために整えられたものだから。
直接僕に言えば済むはずのいくつかの事柄がすべてこんなかんじで、遠回しにあからさまに伝えられる。
それはもう、笑ってしまうくらいに判りやすく。

だから噂を聞いてから十一回目の夜、あんたに最後に会ってから十七度目の夜。
僕はもう、意地を張ることを止めた。

その日僕は回廊に立ち尽くし、何をするともなく何もない庭を見ていた。
春になれば花をつけるかもしれない木々も今は寒々しく枯れている。
それでももうすぐ冬が終わるなあなんて、ぼんやりと思っていた。
庭に面した回廊、広い朝廷では少し中心部から外れるだけで人気がなくなる。
そういえば朝に顔を洗う水もずいぶんぬるまっていたのを

思い返しながら、ゆるむ空気を感じていた。
この灰色の空も冬が終われば、きっと青く柔く澄むのだろう。
そうぼんやりと考えて、立ち止まって何もない庭を眺めていた。
ひっそりと、床を軋ませ近付いてくる足音にはもう気付いていた。
「あ……」
「……」
意識してことさらゆっくりと、立ち止まる足音の方を見やる。
それでもたちまち早く脈を送り始める心臓までは制御できない。
もう何日目になるのかは判らない。いや、本当は判っているけれど、それを意識することは僕の未練を自覚させられるので無理に忘れるようにした。
本当に久しぶりにお会いした聖徳太子様は、悪癖であるジャージの着用を諦めたようだった。
簡単な正装だった。しかしそこに一切の乱れはない。あんなに苦手だと言っていた結び目も丁寧に整えられていた。
いったん開きかけた唇がそっと結ばれる。
飲み込まれた音はきっと僕の名前なのだろうと思ってしまう。
それを太子は言わなかった。
だから僕も何も言わず、静かに廊下の端に寄り頭を垂れて控える。
足下しか見えなくなる。
「あのさ……」
「……」
こういうときに限って誰も通りがかる者がいないのだから困るのだ。
これでは太子を、あるいは僕を、止める者が誰もいない。
「あの……」
沈黙が絶対的な存在感で僕と太子の間に壁を作っていた。
何を言いたいのかなんて、お互い、痛いくらいに判っていたはずだ。
それなのに何も言えない、結局僕らは、どこまでも不器用なままだった。
今までだってお互いに、何を言うことも出来ずにここまできてしまったのだ。そのことに、こんな状況になってからようやく僕は気が付いた。
いっしょにいられるだけでうれしくて、その時間を壊した

くなかった。
心配事も悩み事も些細なものだと思い込みたかった。二人でいるうちはそんなもの、取るに足りない些細なものだと、だから口に出す必要はないのだと思いたかった。
本当はその裏にあった別れに対する恐怖とかを見たくないだけだったのに、僕はいろいろなことを無視してここまできてしまったのだった。
もしもあんたと、そしてこの先の懸念や恐れなんかと、きちんと向き合ってこられたなら今頃何か違っただろうか。
考えてしまった、そんなこと、今更過ぎるただの未練でしかないことだってはっきり判っていたけれど。

口を開いては、閉じる気配。
あんたは散々悩んで何も言い出せない。
僕は何も話す気はなくて、ただあんたを待っている。
僕の中での答えはもうとっくに出ているのだから、もう、言えることなんか何もない。
ただ、あんたを待つだけだ。
冬が終わるな、なんて、言えない言葉の代わりにそんなことを感じていた。
空気は随分ぬるく緩み始めている。

「……引き留めて、すまん」

散々言葉に悩んでいたあんたの唇から落とされたのは硬い声音と一つのため息だった。
限りなく悲しくて、そのくせ安らかな音だった。
あんたも僕と同じように、同じことを今、あきらめたのだと判った。
だから限りなく悲しくて、そのくせ安らかな瞬間だった。
足元ばかりを見たまま、軽く瞑目。
一瞬にいろいろなことを思い出してそれを切り捨てる。
切り離すように短く息を吐いた。

何も言えない僕らは、それでも結局最後に一度だけ抱きしめあった。
この腕はあんたの方からのばしてきたんだと、そんな言い訳にもならない理屈を何度も唱えて、目の前の優しさにすがりつく。
匂いも、体温も、抱きしめたときの身体のかたさも腕をまわした首の高さも、何もかもをそっくりそのまま記憶してしまいたくて、このまま何も言わずに泣いてしまいたくて、ぼろぼろのきもちで必死にあんたを抱きしめた。
それでも気が付けば腕の中には何も残っていない。
別れの合図は背を向けたまま。
足音が遠ざかるのをその場に立ち尽くしたまま、耳をすまして聞いていた。
その音だってもうたどれない。
遠すぎてもう、届かない。

誰も通りがからない廊下だった。
誰も僕らを止める者がいないから、仕方なく僕らは、自分自身で大切なものを切り離した。
その痛みも安らぎもいつかは薄れて消えてしまうものかもしれない。そんなことを考えた。
今までの幸せだってこんな風に呆気なく失われるものならば、今日というこの日の出来事だってただの昔話にできるんじゃないかなと考えたのだ。
心配事や悩みや恐れやその他のいろいろなことをすべて振り切ってここまできたのだ。そう信じることは何も難しいことじゃない。
この悲しみだってもう二度と、あんたに伝えることはないのだろう。
それでいいのだと僕は思った。

次に、踏み出す足を向ける先は上司の部屋だ。
この間の返事をしに行こうと思った。
僕の腕の中にはもう何もない。
危険な航海だって海の向こうの大陸だって、失うものがなければ何も恐れるに足りないように思える。
だから僕はもう一度、望まれるままに海を渡る。

今度はひとりで。
あんたを置いて。
それでももたらされるものがこの国の為になるのなら、それが唯一、今の僕があんたにしてやれることだと思い込んだ。

「夏の終わりに思い出話」

2009/09/23

呼ばれたような気がしてふと足を止めてみても、私以外に誰もいない場所だった。
朝廷という場所は無意味に広い。中心部から外れれば簡単にひとりになることが出来る。
重苦しい正装を引きずって今日もうまいこと逃げてこられた。政も社交も昔ほど熱心になれない。以前は嫌々でも、なんとかこなしてこれた事柄がどうにも苦痛だ。
もう年かなあとか、馬子さんにぼやいたら怒られるんだろう。想像してちょっと笑えた。
でももうこんな世界からは一歩退いてしまいたいなと思っている。
まだ誰にも言っていないけれど。

青すぎて平坦に見える空に重たそうな雲が積み上げられている。
今日も暑くなる、ひとりごちてみてもため息をつくほどの感傷もない。
ただ少しでも気を抜けばお前のことを思い出す。
否定するだけ無駄なのだと思い知ってから、無理に忘れようとするのは諦めた。
だからこの国にお前はいないことを知りながらも、私は思い出の中で遊ぶ。
同じ空の下、を信じられるほどもう無邪気ではないなと苦笑しながらも、思い出すのは同じ空の下、を信じていられた何もない草原の中の二人。
本当に何もない場所、揺れる青草が鋭くて、戯れに手を伸ばしたら拒絶するように痛みが走った。
気をつけろって言ったでしょう、と語尾を強めて叱られる。
落ち込むまもなく手を取られ、傷口はお前の口の中に含まれていた。
湿ってやわらかい塊に指をなぶられて痛みではなくて肩が震えた。
ちらりとお前が私の指を口に含んだまま、上目で私を見た。
最後に一度舌をひらめかせて、傷口の上をなでていく。
それだけで自分でも驚くぐらいに煽られた。こみ上げてくるような感情のままに目の前の体を抱きしめる。

ほうっと、ため息と共に身体から力が抜けていく。

「……暑いです」

「うん、暑い」

責めているくせに、ゆっくりと背中に腕がまわる。

ここには誰もいないから、だからこんなに素直なんだと思うとうれしかった。

人目を逃れて、いろんなことから逃げ出して、そうしてようやく安心できる。

ままならないなあとか思いながらも、確かに幸せな時間だった。

少しだけ、身体を離す。

もったいなかったけど、くっついたままでは顔が見えない。

じっと見つめれば同じ温度で見てくれる。

怒ったように見える目元がうっすらと赤い。

まずそこに口付けてから、唇を合わせた。

風が吹き抜ける。

急かすように騒ぎ出す青草の音に知らん振りをした。

こんな風にひとりでいても、いつだってお前がいてくれるような気がしてしまう。

何もない空間に手のひらを差し出してみた。

怒って、笑って、甘やかして欲しい。

望みの形は明確なのに、どうしても叶わないことがこの世界には多すぎる。

やさしくされたいだけなのに、それだけのことがどうしても遠い。

手を伸ばしたまま考えた。

今が冬ならいいのに。身を切るほどの寒さの中では生きることに必死になれる。余計なことは考えない。

差し出した手のひらが空だとしても、そこに降り積もるものが雪であるならこんな私でも溶かすことができる。

この身の上に降り積もるものが雪であればどんなに良かったことか。

季節が巡れば溶かしてしまえる。

こんな私でも溶かして無くしてしまえるのに。

ただひたむきにお前に向かうこの想いは、溶けることも消えることもなくてただただこの手のひらに降り積もる。

捨てることなんか出来なかった。

忘れることだって出来そうにない。

今この国に、お前はいないのに。

私の歩んでいくであろう道の上にはもう、どこにもいないのに。

ひとりだけじゃ笑い合うことも出来ない。

もう私の手とお前の手がやさしくつながれる日だって遠い日の記憶の中にしかないというのに。

声に出さずに泣いてみた。
冬の終わりに別れを告げた。顔も見れずに背中越しに。
この場所だった。

「ティーブレイク アフタヌーン」

2009/10/06

遊びに行かせろと珍しく真っ正面から宣言してやったら、妹子の方も珍しく断ったりはしなかった。
はいどうぞ、とあっけなく頷かれて、私はこの堂々と突きつけた指先をどうしたらいいんだ。
断られること前提で、そしたら不法侵入で行こうと決めていたのだから完全に肩すかしをくった気分。
「来ないんですか？」
「え？　あ、行くよ、行く行く！」
ぼーっとしている間に開いてしまった妹子との距離を駆け寄って縮める。
不機嫌顔でこっちを見て、妹子は私が追いつくのを待ってから歩きだした。

よし、ガンガン行こう！　に作戦をセットしたのも束の間、妹子んちの玄関に入った途端にもげそうな勢いで頭をつかまれて引き倒されて、悲鳴も上げられないまま気が付いたらコタツに頭から突っ込んでいた。
「大人しくしててくださいね。今、お茶いれてきますんで」
「え……何、何今のなに！？」
「先手必勝かと思いまして」
ばたばたもがきつつ何とか顔をコタツから出したらぐいっと顔を覗き込まれた。妹子の顔が上にあるから影になっている。笑っているのに凄みがあって思わず微笑んでしまった。妹子はずっとニコニコと笑っているけど、その影の入り方がイヤに恐怖を煽るんだけど。
「あんたこないだ僕んち荒らしまくってくれましたよね。今回はそういうのいらないんで。いいですか、そこから出ないでくださいね。絶対出るなよ？」
「えー、そんなんじゃ」
つまんない、って言おうとしてやめた。

見下ろしてくる妹子が満面に笑顔だった。
そのくせ背後になんか渦巻いてるのが見えそうな気がする。効果音で言うならどろどろとかゴゴゴとかキャッサバとか。
ゆっくりと片足を持ち上げたのを見てあわててコタツの中に引きこもった。

「大人しくするよ！　すればいいんだろ！」
「いい子ですね太子」

作戦を速攻で命を大事にに変更してみた。
いい子って言われたってぜんぜんうれしくない。
足音が離れていったからそっと顔を出してみると、妹子が部屋の入り口のところに仁王立ちして相変わらずの笑顔でこっちを見ていた。
びくっとして私は、またコタツの中に引きこもる。

「……こわい」

カメのようにコタツに引きこもっていたら呼ばれて、おそるおそる這い出てみたらお盆を持った妹子が部屋に帰ってきたところだった。

お盆の上に湯呑みは二つ。片方を目の前においてくれる。ゆるりと湯気が立ちのぼっていた。

「はい、どうぞ」
「おお、どうも。ずずず、あづっ、舌ひりひりする！」
「猫舌のくせにいきなり飲んだの！？」

悲鳴をあげて、舌突き出してめそめそしているとほんっとバカですねと妹子が的確かつ辛辣な評価を下してきた。容赦ないなこいつ。ちょっとはなぐさめてみたらどうなんだ。
呆れ顔の妹子は両足をコタツに入れてしばらくもぞもぞしていたけど、落ち着いたのか両手で湯呑みを持ち上げてふーふーと息を吹きかけ始めた。それを見て私は口元に手を当てて笑う。

「何お前熱いの苦手なの？　ぷぷぷー、お子様め」
「あんただって同じでしょうが」

湯呑みの中を見ていた妹子がちらりと視線をこっちにくれる。じっとりと馬鹿にしたような視線に、言っていることはもっともなんだがついつい反論したくなる。

「私はお茶はいれたての熱々が好きだよ。ただな、どうしても舌がひりひりして飲めないんだよな。なんでだと思う？」
「バカだからじゃないですか」

「コノヤロー、摂政に向かってなんてことを」
「じゃあちゃんとそれっぽいことしてくださいよ」
「それっぽい？　それっぽいって何だ？」
「知りませんよ。自分で考えてください。摂政なんですから」
「そうだ、十人の言葉をいっぺんに聞こうか？　じゃあ妹子、十人分いっぺんにしゃべれ！」
「それはもういいよ！」

ぎゃーぎゃー言いながら、今度はコタツの中で足がぶつかった。そのまま互いに譲らずにぐりぐりと足の裏を押し付けあう。

「どーけーろー」
「ちったあ遠慮しろ！　気をつかえ！」
「いーやーだー」

しばらく力比べが続いたものの、結局最後には妹子が足を抜いた。大げさなため息をついて正座に姿勢を直す。どうでもいいけどよいしょって、お前なんかジジ臭いな。
「くそっ……人んちだと思って好き勝手しやがって……ふつう遠慮するだろ人の家なら」
「だって摂政だもん」

ちょっと調子にのって、もう一度お茶を飲んでみたけどやっぱり熱かった。小さくうなって湯呑みを遠ざける。なんだかまだまだ飲めそうな気がしない。
妹子はふーふーと慎重に息を吹きかけて、ゆっくりと湯呑みを傾けていた。
妹子がお茶を飲む音がする。それからほう、と息を吐く音。
私はいったんお茶は諦めて、コタツの上に直接あごを乗せて両手もコタツに入れてだらっとすることにした。お茶は、まあそのうちにまた挑戦しよう。
ずず、と妹子がお茶をすする。ゆっくりと飲んではたまに息を吐く。
なんだかうとうとしてくるようなゆったりとした時間だ。
静かで、コタツの音と妹子のお茶を飲む音だけがする。
だんだんと眠くなってきて、そのまま目を閉じる。
そうすると余計に眠たくなってうとうとしてくる。
このまま眠ってしまえそうだ。気持ちがいい。

「そういえば僕、最近結構もてるんですよね」
そんないい気分にも関わらず、空気の読めない妹子が突然そんな空気の読めない発言をしやがった。ぴん、と頭の中で何かに引っかかるような音が聞こえたような気さえするぞ。何だお前それ、もしかしなくとも自慢かコラ。
むっとしてたら妹子がさらに続けた。

「主に太子の命を狙ってそうな人たちに」

どんな力のかかり方だったのか、意味がわからないけれども事実としてそれを聞いた瞬間、あごが滑って額を強くコタツに打ち付けることになった。ひどい音がした。ものすごく痛い。

立ち直れない気持ちでしばらく額をコタツに押しつけて沈んでいた。それでも何とか頭を持ち上げて妹子を見る。額をさすったら熱くなっていた。じんじんする。妹子は私のこんな状態もどこ吹く風で、ちらりとこっちを見ただけで平然と湯呑みを傾けているところだった。

「え、え、ちょ、それマジですか？」

「マジですよ」

思わず敬語になってしまった私にふ、と一瞬真剣な表情を浮かべた妹子が、湯呑みから口を離してふわりとかわいらしく笑いやがった。それだけでぶわっと全身に鳥肌が立つ。

屈託ない笑顔の妹子ってなんか、不気味。

「ええ。何ででしょうね。太子に近い人間だと認識されてるんでしょうかね？　不服ですけど、でもまあ本当に最近、僕だって良く知らないような御偉い様からって言っていろいろと話をもちかけられるんですよねー」

ですよねー、って、そんな呑気な話じゃなくないか、これ。

それなのに妹子が、最近雨の日が続いて困るんですよ、くらいの温度で話すもんだから、ちょっと私どうしたらいいかわからないぞ。ああなんか変な汗かいてきた。コタツ熱いのかな。

「へ、へえー」

「何かしたんじゃないんですか？　相当恨まれている様子でしたけど」

「えと、あー、した、かも……あれ、馬子さん？　うん？　どれだ？」

「まあ詳しい話なんか聞いていないので、本当にあんたなんかを狙っているのかわからないですけど」

妹子が湯呑みをコタツに置いた。

そして、片手で私の目の前にある湯呑みを指し示して、にっこりと笑いかけてくるのだ。

「だからもしかしたら、そのお茶にも毒が入っているのかも」

歌う調子で言われる。かわいらしく小首を傾げて見つめられた。じわりと目が細められて笑みの形を作る。でも視線は鋭くて剣呑。だから私も真っ直ぐに正面から妹子を見つめてやる。

お互いに動かない奇妙な緊迫感。じじじ、とコタツの暖まる音だけがする。
ふん、と鼻から息をもらして、私は湯呑みに手を伸ばした。じっくりと温度を確かめるように握る。触る分にはもうだいぶ冷めていて指先にやさしかった。
私は湯呑みを片手で持ち上げて、ゆっくりと、妹子の前で見せつけるようにお茶を一口含む。葉の香りがやわらかく広がった。
そのまま、ぬるい液体を喉の奥に流し込む。
ゆっくりと、妹子の眉間にしわが寄って怒ったような、不可解そうな表情に変わった。

「……それでも飲むんですか、あんたは」
「ん、飲むよ」

私はほう、と息を吐いた。いつも通りに美味しいお茶だった。妹子のいれるお茶はいつだって美味しい。きちんと蒸して葉を開かせた、丁寧でやさしい味がする。
だから私は、ますます不機嫌そうな顔になる妹子に見せつけるように笑いかける。

「だって妹子は、そんなことしないだろ？」

にやりと、不敵に。確信に満ちて。
睨む合う間の後に、妹子がため息を吐いた。

「そうやって油断してると、いつか足をすくわれますよ」
「だーいじょうぶだよ、だいじょうぶ」
「どうして」

妹子が怒ったように言う。何をそんなにムキになっているんだろう。
私は楽しい気分で笑って妹子に言ってやる。
また両手をコタツの中に突っ込んで、あごを乗せて背中を丸めて、だらっとした無防備な姿勢で。

「だーって、なんかあったらお前、絶対どうにかしてくれるだろ？」

きっと今私は最高に意地の悪い顔をしているに違いない。
自分で言っていることくらい自覚している。私が妹子に差し出しているのは、最高に性質の悪い投げやりで絶対の信頼だ。
さあ、お前はどうするの、と心の中だけで聞いてやる。
やさしいお前のことだから、こんな風に無防備に手の内をさらけ出されてしまっては、無下に扱うことさえ出来ないんだろ。
わかっていて、試す気分で妹子を見る。
妹子は怒った顔のまま黙ってしまった。
私はそんな妹子を見てにやにやする。ダメだ、口元がおさ

えられない。
怒った顔は困っている証拠、それを隠すための不機嫌な表情。
そうやって簡単に私に揺さぶられてくれるのが楽しくて、にやける口元を隠すためにもまたコタツから手を出してお茶を飲もうとした。
その湯呑みが、私が触れるより早くぱっと伸びてきた手に奪われる。
妹子がそのまま、残っていた私のお茶を一気に飲んでしまってびっくりした。
これで毒は入ってない証明にはなったなあとか思いつつぽかんとする私をよそに、妹子は自分の分と今取り上げた私の分、ふたつの湯呑みをわきによけてあったお盆にのせて立ち上がる。
「熱い方がお好きなんでしょう」
「え？」
思わず見上げた妹子の顔はまだ、怒ったままだった。
きょとんとしてる間にすたすたと妹子は部屋を出て行こうとする。
あわてて姿を追って振り返ると、入り口のところで立ち止まってちらりと妹子も振り返った。
「今、家におまんじゅうしかないですけど」
「え？」
とっさに意味が分からなくて、聞き返してしまう。なんとなく沈黙。
じっと見合ってしまったら、不意に妹子が顔をゆがめて怒鳴った。
その表情が怒ってるくせに恥ずかしそうで、ちょっとだけ赤い。
「……っ、いらないなら、いいですけど！」
「え？　や、いるいる、いりまくるよ！」
慌てて返事をしながらようやく、どうやらお茶のおかわりをくれるつもりらしいということに気付いた。
そしてついでにおやつを持ってきてくれるらしい。
楽しみで、たちまちうれしくなる。
「絶対、そこから動くなよ！？」
私の返事なんか待たずに、妹子の足音が遠ざかっていく。
途中で転びそうに足音が乱れた。大丈夫かあいつ。物の割れる音はしなかったけど。
その乱暴で大きな足音が照れ隠しだと思うと笑いがこみ上げてきて仕方なくなった。
幸せな気分で、私はコタツでぬくぬくする。

「やっぱ私、お前のいれてくれるお茶が一番好きみたいだよ」

誰もいない正面にそっと言ってみる。返事はない。でも、なんだかぽかぽかとあったかい気持ち。

うふふ、と笑って、また乱暴な足音が帰ってくるのを待った。

そしたら今度は妹子の真似をして、ちゃんと吹き冷ましながらゆっくりじっくりお茶を飲もう。

今度は、おまんじゅうと一緒に。

楽しみだった。

「やさしいあなたの殺し方」

2009/10/11

物々しい気配を感じて目を開いた。部屋の中は暗い。まだ朝は闇の裏側だ。今日は月も細かった。それでも瞬きを繰り返すうちに、じわりと目が慣れてくる。

私はじっと、眠る姿勢のまま天井を見つめて殺しきれない気配をたどる。足音と息遣いを静かに数える。

何かな、と思って警戒しているとかすかに窓が鳴った。跳ね上がる心臓の感覚に眉をひそめた。じっと息を潜めて待つと、再度窓が音を立てる。何か小さな物がぶつかるような音だった。

しばし悩んで起きあがる。用意してある沓を履き、影を作らないように窓に寄る。

のぞくと外に妹子の姿があった。ひとりだ。右手に何かを持っていて、それを落とす。石か何かだろう。

妹子が真っ直ぐに腕を広げたから迷わず窓を踏み越えた。妹子は危なげなく私の身体を受け止める。

抱えられたまま腕の中、押し殺した声で聞く。

「どうした」

「とにかく、今はここから離れましょう」

そっと下ろされて足の裏が地面をとらえる。

手首をきつく掴まれた。すぐにゆるむ。加減をして、妹子は私の腕をひいて進む。

私は何も言わずについていった。

急ぎ足が徐々に速度を増して、最後には走った。

ここはどこだろう。林に入った。乱立する木々に視界がきかない。足下では枯葉を踏み潰す音が高く鳴る。

「おい」

呼びかけに妹子は答えない。立ち止まらない、振り向かない。

駆け足のような速さで急いでいる。

「おい！」

違和感が拭い切れない。それどころかどんどん膨らんで、ついに足を絡めとった。
もうこれ以上は進めない。声を張ってその場に踏み留まる。ひときわ高い音で足下が鳴る。つないだ手に力がかかって自然に解けた。遅れて妹子が立ち止まる。振り返らない後ろ姿に思考が焦る。
おかしいのだ。いくら視界がきかない、追う方に不利な条件とはいえこんなに躊躇なく音を立てていられるのは。一度も振り返らないのは。背後を確認しないのは。
まるで追う者なんかいない、そう、わかっているみたいじゃないか？
ここには自分たちしかいないのだと、まるで知っているみたいじゃないか。
違和感だけが先に立つ。
気付けば互いに息があがっている。呼吸の度に肩が揺れた。弾む息を飲み込んだ。

「何があった」

ゆっくりと、ようやく妹子が振り返った。妹子は胸に手を当てて、宥めるように一度なでてた。
話し出す前に一度きつく口を閉ざした。
ああ、とあきらめにも似た思いがこみ上げた。

「いつものことです。あなたの命が狙われています。けれど、相手にすることもないでしょう。朝廷の兵は優秀です。賊はすぐに捕らえられる。あなたはただその間、少しの間だけ身を隠していればいい。馬子様にそう命じられました。だから」
「だから、……なあに？」

声が、自分でも信じられないくらいに冷えていた。
心が信じられないくらいに冷えきっていた。
血はどこに置き忘れてきた。心臓はいったいどこにある。
何もない。ここには何もない。
ひとつの確信が楔のように脳裏に打ち込まれてそこから何かが壊れていく。
一歩大きく踏み込んで妹子に近付いた。ひどく近い距離。口を吸うことだって出来そうな距離。そんな至近で強く目を見据えた。視線を逸らさせない。妹子の頬が緊張にか引きつった。確信に一つずつ裏付けがされていく。
嫌なのに。本当はこんなこと、嫌なのに。確かめたくない。
身体はどこか事務的に動く。反射のようにあらかじめ決められた段取りのように一つずつ事実を確かめる。
なぜだかひどく穏やかに微笑むことができた。

「これは、なあに？」

目の前の身体を抱き寄せた。身体に力が入らないように容

易く引き寄せられて胸に倒れ込んでくる。支えるように抱きしめた。肩口に息がかかる。その部分を熱く感じる。
背中に回した手のひらで骨をたどるように撫ぜた。軌道を読ませない動きで背中を這わせて、最後に腰のあたりに触れる。
はっきりと妹子が身体をこわばらせた。私の身体を押し退けるように妹子の手が腕をつかんだ。あえぐような呼吸、それでも言葉は聞こえてこない。

「これも、馬子さんの命令？」
「ちがう……」

かすれた声が苦しそうに、つらそうに歪んでいる。少し身体を離して額を合わせる。妹子の表情だって声と同じ程度には歪められていた。じっと観察するうちに妹子が僅かうつむく。
傷付いたようなそんな仕草が不快だった。
心に棘が潜む。そこ箇所から急速に凍りついていく。
またひとつ、何かが壊れて亡くなっていく。

「ちゃんと私のことを見なよ。殺したいならさ」

ぞっとするほど冷たい音だった。ぱっと妹子が顔を上げた。
迷いは消えていた。何もなかった。何がしたいのかもわからないままに身体が動く。躊躇なく妹子の服の内に手を差し入れて、そこに隠されていた短刀に触れる。
妹子が私を突き飛ばそうとするより早くその刀を奪って足を払い押し倒す。鞘を抜いて背後に放り投げた。短い悲鳴を無視した。
仰向けに転んだ上に馬乗りになって、頬をわざとかすめさせて顔の真横に刃を突き立てた。

「目を逸らしちゃいけないよ」

じわりと、遅れて頬に血が滲んだ。その様子をじっくりと眺める。ぷくりと大き珠になってやがて壊れて線になる。
まるで壊れてしまったみたいに、喉の奥で笑い声がはじけた。

「これは、お前の意志？　お前の望み？　私の命が欲しいのか？」

妹子は答えない。答えられないんだろうか。何度か口を開いて動かすものの声にならない。目を見開いたまま、瞬きさえも不器用に私を見上げている。信じられない、というような目で私を見ている。だからその目に、声に出さずに言ってあげる。
私だって多分、信じたくなんかなかったよ、と。

「出来の悪いワンちゃんは嫌いなんだ。誰にでもしっぽ振る

ようなのは特に。だから本当は、牙をむいた時点で捨てちゃうんだけど」

ぐ、と余計に顔を近付けた。怯えるように目が見開かれる。光彩の薄い瞳が今は私の影になって黒に近い色をする。そこに私は映るのだろうか。のぞき込んでも影が濃くなるだけだ。

「君のことは好きだからチャンスをあげるよ。どうするの？お前は、どうしたいの？」

「……ごめんなさい」

もうここには何もない。そのはずだったのに妹子の涙を見たときに、肺の奥が苦しく疼いた。思わず眉をしかめる。見ている前で涙は止まらない。

「泣くなんて、卑怯だ」

泣きたいのはこっちだよ、と呟く声はそれでもやっぱり冷えたままだった。まるで嘘みたいだ。そうしてこの声で話すこと全部嘘になればいいのに。そうしたらこの夜を、全部忘れて嘘にするのに。

笑い話になれば良かった。

その一瞬の発想が憐れで可笑しくて、とたんにやさしい気持ちになれた。

「可哀想な子だね、お前は」

ふと思いつきで微笑んでみる。

地面に突き立てた短刀を抜いてそのへんに放った。枯れ葉が高い音を立てた。まるで悲鳴だ。

妹子の頬に手のひらを当てて優しく撫でてみた。瞳が細かく揺れる。目を逸らしたがっているのがよくわかる。その怯えを可愛らしく感じる。

可哀想な子なのだ、こいつは。

そう思えば何もかもを許せる気がした。

気のせいかも知れないけれど、気持ちだけは穏やかになれた。

そうやって頬をなでて、ぺろりと傷を舐めてみた。ざらつく味が舌先に広がる。ついでに目尻に口付ける。ぴく、と震えただけでそれ以上妹子は動こうとはしない。そのまま涙を吸う。

「しょっぱい」

舌を突き出して笑った。今度は首筋に吸い付く。流れた血の筋をたどった。丁寧に舐めて綺麗にする。甘いんだか不味いんだか、とにかく錆臭い味を舌先に転がす。喉仏が動くのがおもしろくって戯れにそこにも舌を這わせた。

甘いんだか不味いんだか、それでも妹子の味がした。

すべて舐め取ってしまうとまた傷口まで戻る。傷口をいじ

めるようにぐり、と舌を押しつけた。妹子のあごに力はこもるのが見える。それでもこらえきれずに喉がひくりと動いた。

「可愛いね」

嘘みたいに言って手のひらで目を覆い唇を塞いだ。血の苦さを分け合うように舌を擦り合わせる。わいた唾液が口の端からこぼれていった。手のひらを睫がかすめる感触に、妹子が目を閉じたのを知った。もっと深く妹子を味わう。

このまま世界が終わってしまえばいいと思った。嘘にならないなら、なかったことに出来ないのなら、終わってしまえ、こんな世界は。

もう戻れないのだと確かに思った。それじゃあこの、唇を重ねているのは誰だろうね。

もうここには何もない。

やさしい妹子も、愚かな自分も。

いっしょに死んで、殺して、誰もいない。

右手が刃を求め空をさまよった。

左手が首に触れたがる。

組み敷いた身体のかたさを思いながら、今はただ、この夜に溺れてしまいたかった。

「みにくい自分の生かし方」

2009/10/13

こんなことしたくない。そう、一言、叫べれば良かった。
そんな場面なんか、チャンスなんか、いくらだって転がっていたのにも関わらず、できなかったのは、しなかったのは、他でもない僕自身。
そのときの打算を誰に言うこともできない。
死んだ方がましな状況に立たされたって結局僕は臆病で、最後まで一人じゃ何も選べない。
そうやってひたすらに決断を先延ばしにしてきたその結果がこれだ。
涙なんかでない。涙しか出ない。
泣き言を垂れ流すだけのただの子供だ、僕は。

可哀想な子だね、と言ってもらえたとき、どうしようもなく許されたような気がしてた。
それさえも弱さの証明にしかならなくて、このまま死んでしまえたらその方が楽なのに、やっぱり僕は一人じゃ何も選べない。

何の決意も出来ないままただ指示された場所を目指した。
つかんでいた手首が熱かった。僕の手が冷たいのかもしれなかった。
腰のところに隠した短刀が固くて痛い。
「おい！」

手のひらが解けた。そこに拒絶を感じた。
このまま心を殺して刃をかざすことが出来れば良かった。
結局僕は何も選べない。
この人を騙しきることなんか出来ない。きっとどんなに些細な仕草からでも僕の嘘を見抜くだろう。
怖いのに逃げ出せなかった。
きっかけを作ったのは他人とはいえ、僕は確かに、この人を自らの手にかける夢を見たのだ。
僕がこの人にのめり込むごとに、執着する度に、状況は複雑になっていく。
醜さを自覚しながらも押さえきれない激情を持て余す。

この人を飼い殺しにする、という話があるらしい。
この人の考えが理解できない馬鹿が多すぎる。
理解できないならただ従っていればいいのに、その正しさを理解できないどころか恐怖さえ抱く。
閉じこめてしまう、という選択を身分の貴い人たちはしたらしい。
そんなことが許されてたまるか。
あの人を僕は僕から奪わせない。

僕が。
あんたを、このどうしようもない世界から奪い去る。

持ちかけられた話を利用した気になっていた。
差し出される刀を遠慮なく受け取る。
利用されてたのはどちらかわからない。
利用されていたとしても構わない。
重要なのは僕が何を為すかであって、それ以外の要素はどうでもいいはずだ。

気持ちは揺らぐ。時間は過ぎる。

巻き戻しもやり直しもきかないままに。
ぬくもりを目の前にしなければ夢を見続けていることが出来た。
せめてそう信じることを許されたい。
太子は迷い続ける僕から短刀を奪い、足を払って押し倒した。
仰向けに転んで馬乗りにされる。頬の違和感はぬめる体温、その自分の命を気味悪く感じる。
刃の冷たさの方がよっぽど慕わしかった。
僕は何をしているのだろう。何で生きているんだろう。
何度も目の前に人に刃を突き立てる様を想像した。その甘い妄想に酔った。
逆の立場にあって、今僕は、それ以上にこの人に殺されることを望んでいたのだと痛烈に理解した。
このままその刃で抉って欲しい。
この醜い内側を全部ぶちまけて、貴いあなたの手を汚したい。
太子は見たこともないような顔で笑っていた。地面に突き立てられた短刀を握る手は震えたりしない。この人は僕とは違う。自分で選ぶことが出来る人なのだ。僕とは違う人なのだ。
そう思うのにどうしてか、目の前の出来事が虚ろに遠くて受け入れがたいとも思う。
こんな表情をする人だったのかと、まるで逃避でもするように驚くことしかできない。

それだけしか考えられない。
まるで夢のように、現実が遠い。

「出来の悪いワンちゃんは嫌いなんだ。誰にでもしっぽ振るようなのは特に。だから本当は、牙をむいた時点で捨てちゃうんだけど」

ぐ、と太子に顔を近付けられる。その真っ暗な瞳に自分さえ映りこむのではないかという錯覚を抱いた。目がそらせない。ただ見つめるしかない。でも、何も見えない。いくら目を凝らしても何もない。いつものこの人はどこにもいない。

「君のことは好きだからチャンスをあげるよ。どうするの？お前は、どうしたいの？」
「……ごめんなさい」

ただ、そんなことしか言えなかった。
何も考えられないままに、訳もわからず悲しかった。

「泣くなんて、卑怯だ」

泣きたいのはこっちだよ、と短刀を握る人がつまらなそうな顔で吐き捨てた。
今夜僕は確かにこの人を殺したんだと、そう突き抜けるように理解した。

昨日までの、今日までの、無邪気に笑ってくれた人はもういない、そのことを不意に、全身を貫くような強さで理解する。
自分でしたことなのにどうしようもなく悲しくて、いつまでも涙が止まらなかった。

「可哀想な子だね、お前は」

ふと太子が微笑んだ。
嘘みたいにやさしい笑い方だった。
太子が短刀を抜いて、そのへんに放る。枯れ葉の壊れる音が鳴った。
太子の手のひらが頬に当てられる。やさしく撫でられて、まるで犬がそうするみたいにぺろぺろと傷を舐められる。
一度目尻に吸い付かれて、涙を拭われた。次は唇は首に触れていき、流れた血をたどってまた濡れてあたたかい舌が傷口までかえってくる。
わざと傷口をこすられて痛みが走る。また血が流れた。そうやってあふれた体液を太子は舐めとっていく。じくじくと傷口が熱を生む。
奥歯をかみしめて声をこらえても、喉の奥がひくつくのは止められない。呼吸が跳ねる。

「可愛いね」

からかうような声音だった。嘲われているようで顔が熱くなる。

手のひらで目を覆われてもう何も見えない。

舌先に擦り付けられたのは、甘くて苦くて塩辛い、死んでしまいたいくらいに悲しい味だった。